さんけん新聞

発　行
ＮＰＯ法人
三段峡―太田川
流域研究会
（代表・本宮炎）

〒731－3813
広島県山県郡
安芸太田町
柴木 1734
☎090・
3421・3046

聞く会

樽床・峡北館の宿帳三十五冊
絵や句 筆で記す著名人
祖父後藤吾妻の思い出語る克子さん

熊南峰や斎藤露翠とともに三段峡開発に尽力した後藤吾妻（一八八〇―一九六七年）が、樽床ダムに沈む前まで営んでいた宿「峡北館」の宿帳を見せてもらうため九月三日、さんけんメンバー三人と三段峡ホテルの高下務さんが、広島市中区光南に住む孫の後藤克子さん宅を訪問し、思い出を聞いた。

後藤克子さんに祖父吾妻さんや樽床ダムに沈む前の様子を伺った「聞く会」

「浪人 熊南峯」の署名がある宿帳

宿帳は中国新聞八月十九日付の「三段峡 往時しのばす宿帳」で紹介された。一九二四年からのもので三十五冊。挿絵を描いた画家や一句詠んだ文化人、政治家などの著名人が筆で記している。当時の文化的な三段峡の見方、注目度が伝わる貴重な資料だ。

保管していた克子さんは、「天候が荒れたりするといつも心配そうに峡内へ入って行った」と祖父の様子を語った。高下さんは「三段峡ホテルの名ははじめ峡南館で、峡北館とはペアだった」と話し、関係性の深さを強調した。

宿帳は後日、広島県立文書館（同市中区）へ寄贈された。今後の研究で三段峡の歴史を掘り起こす新たな発見が期待される。

NHK「さわやか自然百景」
深入山 草原の貴重な生態紹介

九月二十五日に放送されたＮＨＫ総合テレビ「さわやか自然百景」で、山焼きによって維持されている深入山の草原ならではの自然環境と生態が、希少チョウ類や鳥、草花を通して紹介された。

山焼き後の芽吹きや真っ先に咲くショウジョウバカマ、虫を捕らえるモズや子育てするホオジロが登場。湧き水近くのキセルアザミを食物にするヒメシジミ、卵を産む瞬間のヒメヒカゲ、ワレモコウの花に卵を産み付けるゴマシジミなど、希少チョウ類が捉えられている。ＮＨＫ＋（プラス）オンデマンドで配信。

さんけんは二〇一八年から深入山で、ゴマシジミの生息調査をしている。

二段滝でシャワークライミング
爽快!! 日本山岳会員が先導

日本山岳会広島支部の会員三人とさんけんメンバー四人が九月十四日、二段滝でシャワークライミングをした＝写真。リーダーは前日、さんけん理事に就任したばかりの大田由孝さん。

空気で膨らますボート「パックラフト」で猿飛を渡り、二段滝へ。山岳会員が先導して登り、瀬尾淳さんけん副理事長らが続いた。濡れた絶壁は滑りやすかったが、壁に挟まりながら慎重に進んだ。登った後の上空の開放感や上から見る滝の勢いを体感した。

さんけんは子供向けの沢登り入門編や大人用のプログラムを提供している。

さんけん自然塾
採集・観察・昆虫食

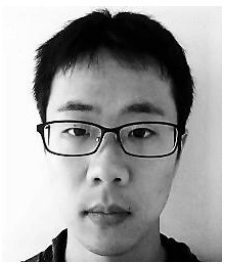
さんけん自然塾「鳴く虫と秋の味覚」が九月十八日、十組四十人が参加して深入山で開かれた。バッタやトンボなど希少な六種を捕獲した。採集した昆虫を観察してクイズを出し合い、正解者は大きな声を上げながら昆虫食を口した。保護者は「虫を触れなかった子が、食べられるまでになった」と、驚いていた。プログラムは中高生三人が企画した。

一口メモ

▼峡谷は生き物

九月十九日に最接近した台風十四号による豪雨で、横川口―猿飛間で橋が崩落、猿飛の船着場も大きな被害を受けた。秋の観光シーズンに間に合うよう復旧工事が進んでいる。毎年どこかで被害が発生し、復旧する。土砂や石が動き、長淵の河原の形状も変わる。大きな景色の劇的変化はないが、細かくは違う表情を見せる。三段峡は生き物ではないかと感じる。

新理事に大田由孝さん 大崎壮巳さん



九月十三日に開いた理事会で、定款十四条に基づき、大田由孝さん＝写真右＝と大崎壮巳さん＝同左＝の両氏を理事に選任した。

大田さんは日本山岳会広島支部の会員。三段峡では沢登りの指導やツアーに携わり、二谷を探索するなど、アドベンチャースポーツの魅力を発信している。大田葬祭社長。

大崎さんは広島大学大学院統合生命科学研究科博士課程後期二回生。広大さんけん部。ＷＥＢ図鑑「原色広島三段峡図鑑」を立ち上げ、博物館展示の準備を進めている。

三段峡の鳥たち ⑪

カワウ

厄介者の潜水名人

県内では一九八五年以前、滅多にいなくて見た人は自慢していた。九〇年代に入って約五百羽が冬鳥として広島湾で見られるようになった。近年は数千羽にもなり、海産魚やアユを捕食するので害鳥として駆除されている。珍鳥だったのは今や昔である。三段峡周辺では温井ダムや王泊ダムで繁殖していて、三段峡や柴木ダムには少数が魚を捕りにやって来る。

かつてはペリカンの仲間とされていたが、ＤＮＡ解析によりカツオドリに分類された。ヘビウやグンカンドリも同類で魚類を餌にする。中でもウの仲間は潜水が得意で、カワウは一日五百㌘の魚を捕食すると言われる。群れで魚を追い詰める行動も見られる。

一日五百㌘の魚捕食 珍鳥が害鳥に

発達した水かきを持ち、足は胴体の後方にあるため大きな推進力を得る。水中で速く泳げるよう羽毛に含まれる空気を素早く抜く。このため羽毛が濡れる。水から上がって岩の上などで羽根をダラリと広げて乾かす姿がユーモラスだ。

三次や岩国の鵜飼いに使用しているウは近縁のウミウである。茨木県伊師浜海岸で捕獲されたもので、逃げる可能性があるので手綱がつけられている。一方、中国では鵜匠が繁殖させたカワウを使用する。人が育てたので慣れていて、手綱なしで鵜飼いをしている。（上野吉雄）